

餞別について「馬の鼻向け」

平成二十九年五月二十六日 於加茂法話会

餞別とは、遠くに旅立つ人に対して送る「別れの品」です。

昔、旅に出る人の馬の鼻を行く方向へ向けて見送った（目的地に向けて道中の安全を祈ったことから）習慣から、「うまのはなむけ」が餞別の意味となり、それが「贈り物」に転用されたといわれています。

現在と違い、昔は旅は道中にさまざまな苦難を伴うのが普通でした。そんな旅においてお餞別は単なる別れの印、あるいは金銭的援助として贈られるだけでなく、大勢の者の合力によって旅の安全を願う意味も込められていたのです。

この習慣を、成功祈願を願って退職者へのプレゼントとしても使用するようになり、現在では、はなむけの品物として「餞別の品」を贈っているという訳です。

とはいえ、最近ではそれ以上に大きな意味を持つようにもなりました。

転勤や転職、退職、転居などをする人に、これまでのおつき合いを感謝して「どうぞお元気で」という気持ちを込めて贈るのが現在における「餞別」のもっとも大きな意味合いです。

目上の人には「餞別」よりも「御礼」が無難。餞別を貰った時にお返しをする必要はないのです。「一万円以内」！生活実用品など役立つものをプレゼントしよう。「餞別のお返しはお礼状で」

熨斗の表書きは「退職御祝」「退職祝い」「祝退職」「祝御退職」「祝定年御退職」などといった言葉を書くのが熨斗袋の正しいマナーです。

餞別としてお金を包む場合の熨斗袋（のし袋）は、蝶結びのご祝儀袋で表書きは「御餞別」「おはなむけ」と書くようにしていた。

曹洞宗では、修行を終えて・お寺に帰る事を「送行・そうあん」（修行を終えて下山する事）
乞暇（こうか）いとまをこうこと。

逆に「上山」じょうざん・掛搭（かた）その寺に滞在を許された禅僧が錫杖（しやくじょう）を
禅堂の搭鉤（とうこ・釣り針のようなフック）に掛けること。

禅宗では、餞別の事を次のように言います。

贖敬（じんけい）送行【贖送（じゆんそう）の意】旅だつ人に物をおくる。はなむけをする。餞別。

贖儀（じんぎ）旅立つ人に贈る金品。せんべつ。離別する人に自分の心をこめて金品。

贖送（じんそう）旅だつ人に物をおくる。【贖】会意兼形声。「貝」音符盡（じゆん）出（しゅつ）つくす。

贖銭（じんせん）旅だつ人におくる金銭。餞（せん）は、人をおくって小さな別れの宴を設ける事。

住職を退任することを「退堂・たいどう」といいます。住職から「東堂・とうどう」と言う。

椅勞（こうろう）退堂式・祝い喜ぶ気持ちではなく、労をねぎらうのである。

可漏（から・熨斗袋のこと）に入れて拝表を着ける。

寺名〇〇小住

赤い拝表（はいひょう）に 謹上 贖敬 〇〇九拝

正壽寺住職 吳 定明合掌

